# 特集 蛍と暮らす

一帯の山を光で埋め尽くし、
「山が動く」と形容された出の山公園のホタル。
全盛期にはひと夏で10万人を超える観賞客があった。
今、激減していたホタルの数が、戻りつつある。
「またいつかあの頃のように」。
そう願い動く人がいる。
4年ぶりに復活したホタル恋まつりに足を延ばして
ホタルが生存している素晴らしさを
肌で、心で、感じたい。

写真／平成２年頃の出の山

蛍と暮らすまち

## ホタルと出の山公園

豊富な湧水と多様な生態系が、
私たちの誇りであるホタルを育んできました。

### ホタル観賞の名所 出の山公園

出の山公園は、かつて数万匹のゲンジボタルが飛び交い、1カ月間で11万人が訪れるなどホタル観賞の名所として知られてきました。多い時期には、1㍍の間隔に50匹が飛翔。山沿いには300㍍の帯状の光景が見られるほどでした。

出の山の池は、1674年に旧薩摩藩によって、かんがい用水として築造。その後、長い年月と湧水が、豊かな生態系を培い、多様な動植物のすみかとなっています。

毎秒1㌧の湧水は、昭和60年に環境庁「全国名水百選」に認定。また平成元年には、その環境と市民による保護活動が評価され、環境庁「ふるさといきものの里」に選ばれました。

### 4年ぶりにホタル数増 ホタル恋まつり復活

出の山のホタルは自然のままに保護されてきました。数は増減を繰り返してきましたが、平成22年に激減。この3年間、まつりも休止してきました。そして今年、市は飛翔数がここ5年間で最高と予測。まつりを再開し、保護のため立入禁止にしていた水路も開放しています。戻りつつあるホタル。4年ぶりに出の山のホタルを間近で観賞できる年となりました。



インタビュー

### 今年は幼虫数が回復。多くの飛翔に期待

宮崎自然環境調査研究会では、平成4年から出の山のゲンジボタルの調査や飛翔数の予測を行っています。水中の幼虫、上陸する幼虫数の確認や気象観測などから、ある程度の予測ができます。

ここ数年、数は減少してきましたが、今年は水中の幼虫や上陸幼虫の数を多く確認することができました。

ホタルの減少は、さまざまな要因が考えられます。環境の変化や光害、エサとなるカワニナの減少など。昨年度は、ホタルが多数発生する野尻やえびの市、串間市などの調査を行いました。結果、カワニナの餌であるケイソウの保護や鯉を捕獲するべきことも分かりました。こういった調査がホタルの保護につながることを期待します。

写真左から研究会の薦田剛さん、村井健二さん、永井彪さん、西邦雄さん

宮崎自然環境調査研究会
宮崎県環境保全アドバイザー
西（にし） 邦雄（くにお）さん

蛍と暮らす

## ホタルの生態を知る

意外と知らない生態を知ることで、ホタルの光が、これまでと違って見えるかもしれません。

### 人生の大半は水中。成虫は10日の命

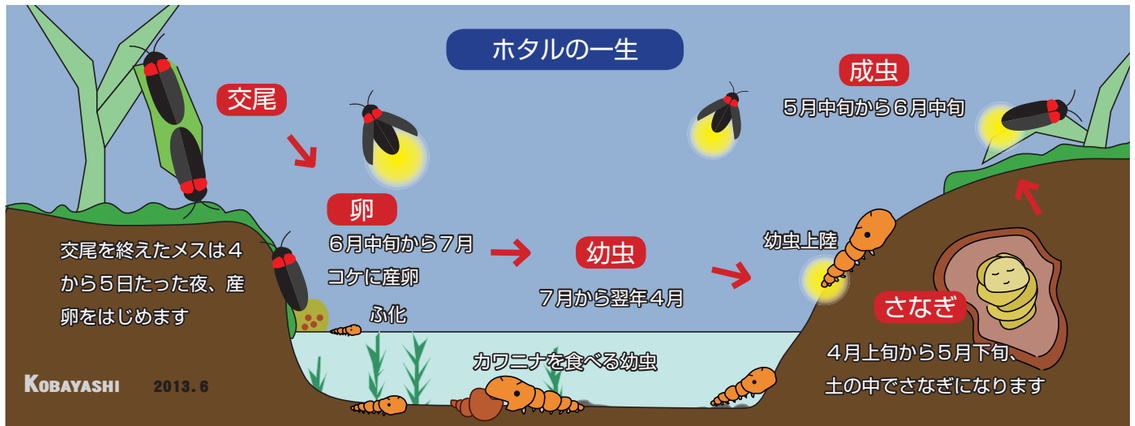
ホタルは、里山の水田や小川に生息し、5月中旬から6月中旬かます。成虫の生存期間は約10日。この期間に、交尾を終え、コケなどに産卵します。卵は約1ケ月後にふ化。幼虫は水中に生息し、貝類を食べて成長します。出の山では、主にカワニナなどを食べています。

幼虫期は約1年。4月に幼虫は水中から陸に上がり、土の中でさなぎになります。上陸は、小雨が降っているか、地表が濡れているのが条件。夜に発光しながら上陸します。さなぎは約1ケ月で羽化。成虫になり、飛翔をはじめます。

また、国内で見られるホタルは、40種類以上。一般にはゲンジボタル、ヘイケボタルなどが有名で、出の山のホタルは、ゲンジボタル。中でも体が大きく、明るく強い光が特徴です。

### 水質だけじゃない。ホタルの生育条件

生育条件としては、汚染されていない水質や豊富な餌などが上げられますが、ホタルは自然のサイクルの中で生きています。餌となるカワニナ、さらにその餌になる植物、その植物の生育条件など、さまざまな条件が複雑に関係し、ホタルは生育しています。



毎年行われているボランティア清掃作業。
市内の企業、団体、観光協会や市などが参加しています。
今年は５月９日に行われ、草刈りや道路の清掃などを実施。
例年より多い 200 人の参加がありました。

蛍と暮らす

# ホタルを守る

ホタルが生きるには、人の理解が不可欠。
地元の保護活動なしに、出の山は語れません。

## 治水と環境維持を両立し、自然のままに保護

日本各地でホタルが減少しています。養殖・放流で数を保っている名所も少なくありません。出の山では、自生する環境を維持するため、自然のままに保護が行われています。長い間、ホタルが見られるのは、土地改良区の理解、小林ほたるの会などによる保護活動があったからです。

出の山の小川は農業用水として使われてきました。土砂災害が発生する危険があったため、昭和59年から護岸の整備を開始。ふ化の妨げにならないよう、中央に穴の開いた「ホタルブロック」を積み重ねた自然保護工法を採用。ホタルが生息しやすい環境に整備されました。

## 条例の制定で、保護と育成を強化

また、幼虫数が減ってしまったことから、これまで市でも多くの対策をとってきました。

平成４年には、小林市蛍保護条例を制定。ホタルや生育に必要な動植物の採取などを禁止しています。

また、貝類を食べてしまう動物の駆除、木々の伐採、保護を啓発する看板の設置や、水質検査などを実施。まつりの時期には、光を遮断する幕を設置するなどの保護に努めています。

インタビュー

## 地域一体となって保護活動を

小林ほたるの会
小林市観光協会副会長
小薗（こぞの） 勇（いさむ）さん

ホタル保護を始めたきっかけは、昭和55年。子どもと出の山に行き、数万匹の大群を見つけたときです。その美しさは衝撃的で、出の山のホタルは市の宝であると考えました。すぐに地元の区長さんや事業者などに声をかけてゲンジボタル自然保護会を発足。会長を務め、調査や保護活動を行ってきました。また、地元の有志と観賞地を整備し、鑑賞会やまつりを開催。用水路の護岸工事に対する申し入れも行いました。平成４年には「小林市蛍保護条例」が制定され、環境保全の大きな推進力となりました。

しかし、近年はホタルの数が減少しています。さまざまな要因が考えられますが、残念なのは放されたと見られるアイガモや、ホタルの餌となるシジミの盗掘があったこと。こういう行為が、少なからず影響していると思います。皆さんの協力なしにホタルの保護はできません。再びホタルの乱舞が見られるように、一緒になって環境づくりをしていきたいですね。



インタビュー

## 一斉に光るさまを観賞してほしい

宮崎自然環境調査研究会
宮崎昆虫同好会
永井（ながい） 厚（あつし）さん

風がなく、むしむしするような湿度の高い暖かい日に多く飛翔します。夕方、日が沈む午後７時半から９時頃までがピークです。

ゲンジボタルの特徴は、オスが同調して光ること。一斉にまたたくさまが観賞のポイントです。またホタルの光は熱くないので、ぜひ触れてみてください。

## 見て、触れて ホタルを堪能しよう

４年ぶりに出の山ホタル恋まつりが復活しました。まつり期間に限り、立入禁止にしていた水路横の散策道を開放。運がよければ乱舞の中に身を置くことができるかも。

まつりは6月9日まで。研究会によると、中旬頃まで飛翔が確認できそうです。また、捕獲や車のライト、懐中電灯などの光は、ホタルの生存に影響を与えます。マナーを守ったうえで、観賞しましょう。

蛍と暮らす

# ホタルと暮らす

ホタルの光は、豊かな「自然」とそれを守る「人」の結晶。ずっと、ホタルが飛び交うふるさとに。

## 残していきたい。ホタルの住むまちを

全国各地でホタルが次々と姿を消している中、出の山では増減をくり返しながらも、生き続けています。それは私たちが、いち早くその価値に気づき、保護してきたから。この地が長く名所と言われているのも、熱意と取り組みの成果です。ホタルの光は、豊かな「自然」と私たち「人」の結晶。ホタルの飛び交うふるさとを、子どもたちに残していきましょう。ずっと。

コンパクトデジカメでも撮れる

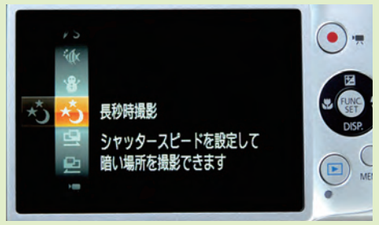
# ホタルを写真に残してみよう

ホタルの幻想的な舞を写真に残してみませんか。一眼レフでなくても、撮ることは可能。ぜひチャレンジしてみてください。ホタル撮影にフラッシュは厳禁です。（カメラの機種によっては、撮影できない場合があります）

**1** カメラを三脚など、何かの上に乗せて固定しましょう。

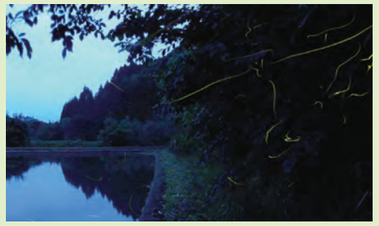
手振れをしないために三脚は必須。持っていない場合は、地面に置くなどして固定しましょう

**2** 「星空モード」や「夜景モードなど」長時間撮影できるモードを選びます。




長さが選べる場合は、15 秒、30 秒、60 秒など、実際に撮って試してみましょう

**3** いざ、撮影。撮れた写真はこちら



平成 22 年野尻町岩瀬川沿いで撮影